II. 遺跡調査の概要

南木戸（みなみきど）遺跡

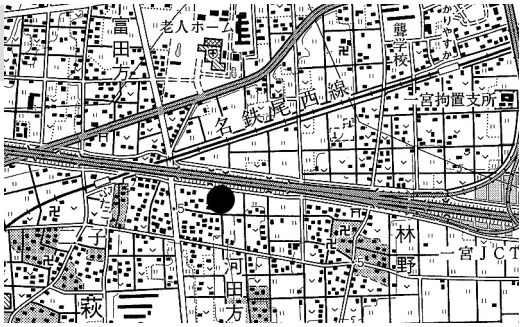
所　在　地　一宮市萩原町河田方南木戸

調 査 理 由　愛知県水道用水供給事業

調 査 期 間　平成 15 年４～５月

調 査 面 積　195 ㎡

担　当　者　石黒立人・樋上　昇・早野浩二



調査地点（1/2.5 万「一宮」）

調査の経過　本遺跡は愛知県水道用水供給事業にともなう事前調査として、愛知県企業庁ならびに尾張水道事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成15年４月から５月にかけて実施した。調査面積は195㎡である。

立地と環境　南木戸遺跡は一宮市南西部の日光川左岸の微高地上に立地し、標高は現地表面で約５ｍを測る。

調査の概要　昭和37年には名神高速道路の建設にともない、名鉄尾西線と交叉する地点の東約110～120ｍにある河田方高架橋の敷設工事において、古墳前期に属する多量の土器・木製品が出土し、一宮市教育委員会が遺物の採取を行った。

今回の調査では、名神高速道路南側の側道にあたる市道256号線の下に水道管を埋設するための事前調査として、幅２ｍ、全長65ｍの調査区を設定した。その結果、東西幅がおよそ40ｍほどの微高地を確認し、廻間Ⅰ～Ⅱ式期に属する竪穴住居・溝・土坑を検出した。　（樋上　昇）


調査区全景（東から）


調査区東半部（東から）


ＳＢ 03 全景（東から）


ＳＫ 182 土器出土状況

一色青海遺跡（いっしきあおかい）

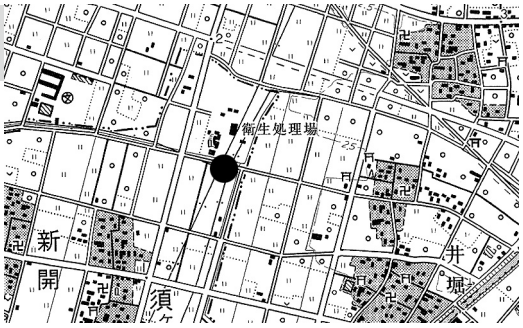
所　在　地　中島郡平和町須ヶ谷

調 査 理 由　日光川上流流域下水道事業

調 査 期 間　平成15年６月～平成16年３月

調 査 面 積　7,124 ㎡

担　当　者　石黒立人・樋上　昇・早野浩二



調査地点（1/2.5 万「清洲」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は日光川上流流域下水道事業にともなう事前調査として、愛知県建設部下水道課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成15年6月から平成16年3月にかけて実施した。調査面積は7,124㎡である。

立地と環境　一色青海遺跡は濃尾平野の南西部に位置し、縄文海進期に形成された第二浜堤列と呼ばれる東西にのびる微高地の西端に立地している。標高は現地表面で約1.5ｍを測る。

調査の概要　すでに当センターが平成２年度から平成８年度にかけて、合計23,500㎡の発掘調査を行っており、弥生時代中期後葉と鎌倉～戦国時代の２時期にわたる遺跡であることがあきらかとなっている。今回の調査区（03Ａ・Ｂ区）は弥生時代の集落のほぼ中央に位置している。

弥生時代　弥生時代中期後葉の遺構としては、掘立柱建物跡４棟以上、竪穴住居跡約100棟、方形周溝墓５基、土坑約1000基、溝約20条を数える。

掘立柱建物跡SB17は梁間１間（５m）、桁行６間（16.25m）の大型建物である。柱掘形は1.5× １mの隅丸方形を呈し､深さは現況で約１ｍを測る。柱はすべて抜き取られており、礎板のみが遺存していた。竪穴住居跡SB11を切って築造され、竪穴住居跡SB35に切られており、同一場所での建て替えの痕跡は認められない。SB17の南東に位置する掘立柱建物跡SB77は梁間１間、桁行３間で、独立棟持柱を有している。

この掘立柱建物跡 SB17・77 の周辺には長辺が 10 m前後の大型竪穴住居跡が集中している。これらの建物群の主軸はいずれもほぼ同一の方位をとっており、かつ竪穴住居跡はほぼ同じ位置で複数の建て替えの痕跡が認められる。うち、竪穴住居跡SB55・57 の炉には、扁平な川原石が縦に埋め込まれていた。また、SB99 では土器埋設炉を検出した。前者は伊勢中部あるいは西三河から関東地域に、後者は長野県域に一般的な炉の形態だが、尾張ではこれまで例がなく、いずれもその系譜が注目される。

竪穴住居跡の多くには炭化材が遺存していた。しかし、床面直上からは完形の土器が遺存しておらず、多くの土器片が炭化材より上の埋土中から出土することから、失火ではなく、竪穴住居の廃棄にともなう意図的な焼却である可能性が高い。

方形周溝墓群は調査区の東端部で５基確認した。うち、全形がわかるのはSZ01 のみで、墳丘の一辺は約10ｍを測る。周溝内からは完形の細頸壺数点が出土している。

鎌倉～室町時代　鎌倉～戦国時代の遺構としては、大型の方形土坑が約150基と溝約40条がある。生活の痕跡はなく、墓域として利用されたと考えられる。（樋上　昇）

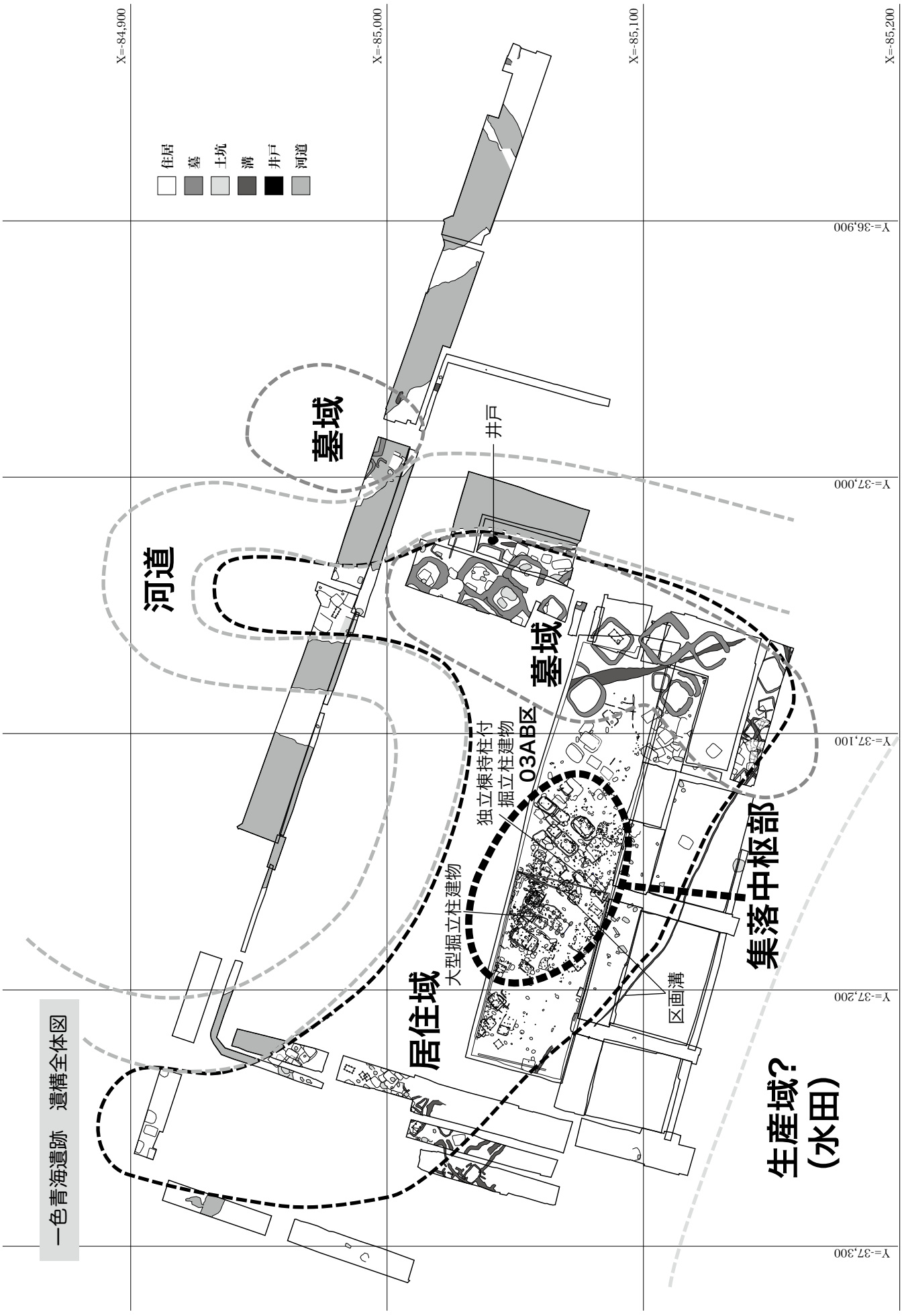


図１　一色青海遺跡弥生時代遺構全体図（１：2,000）

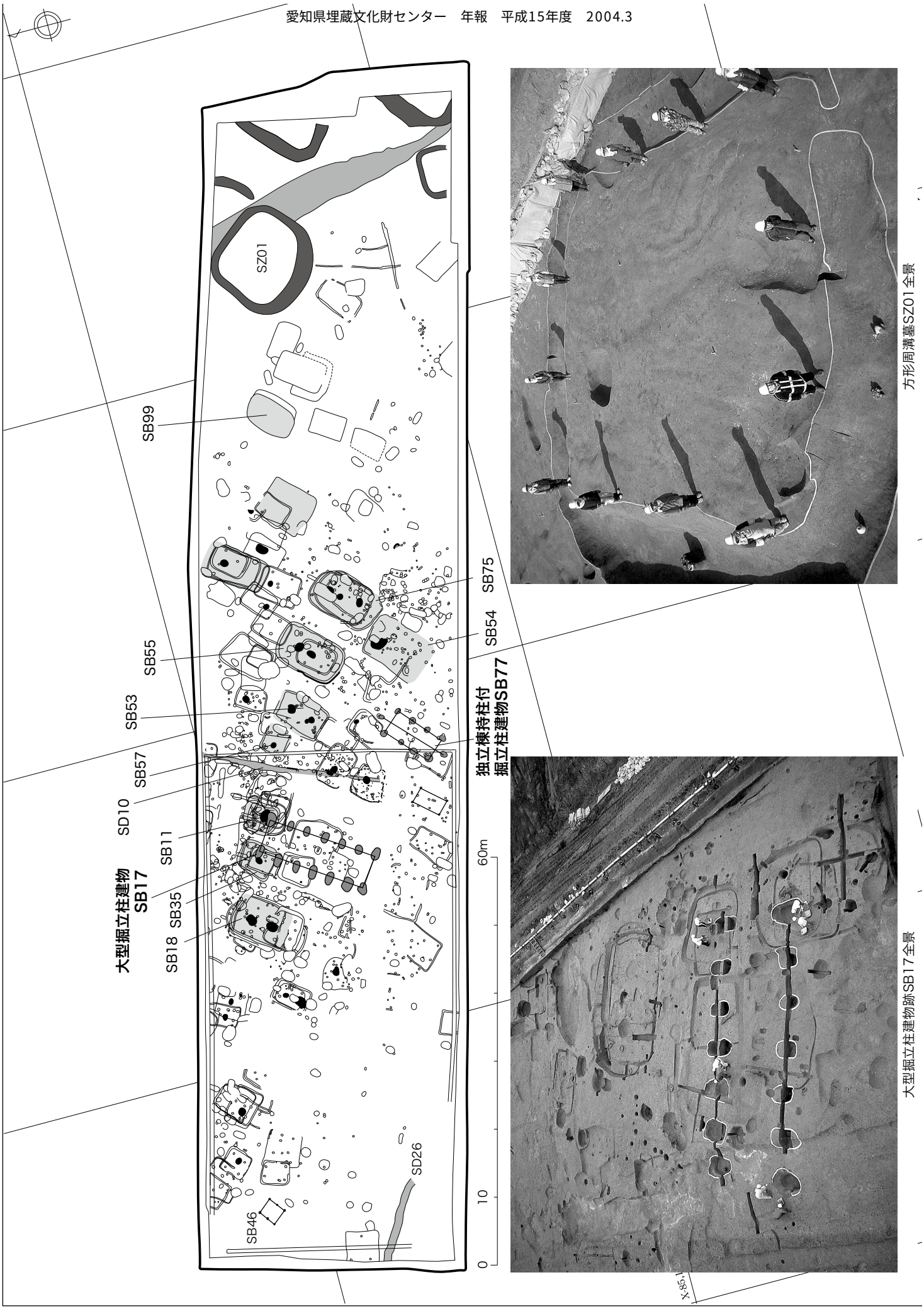


図2　03AB区弥生時代遺構全体図（1：700）

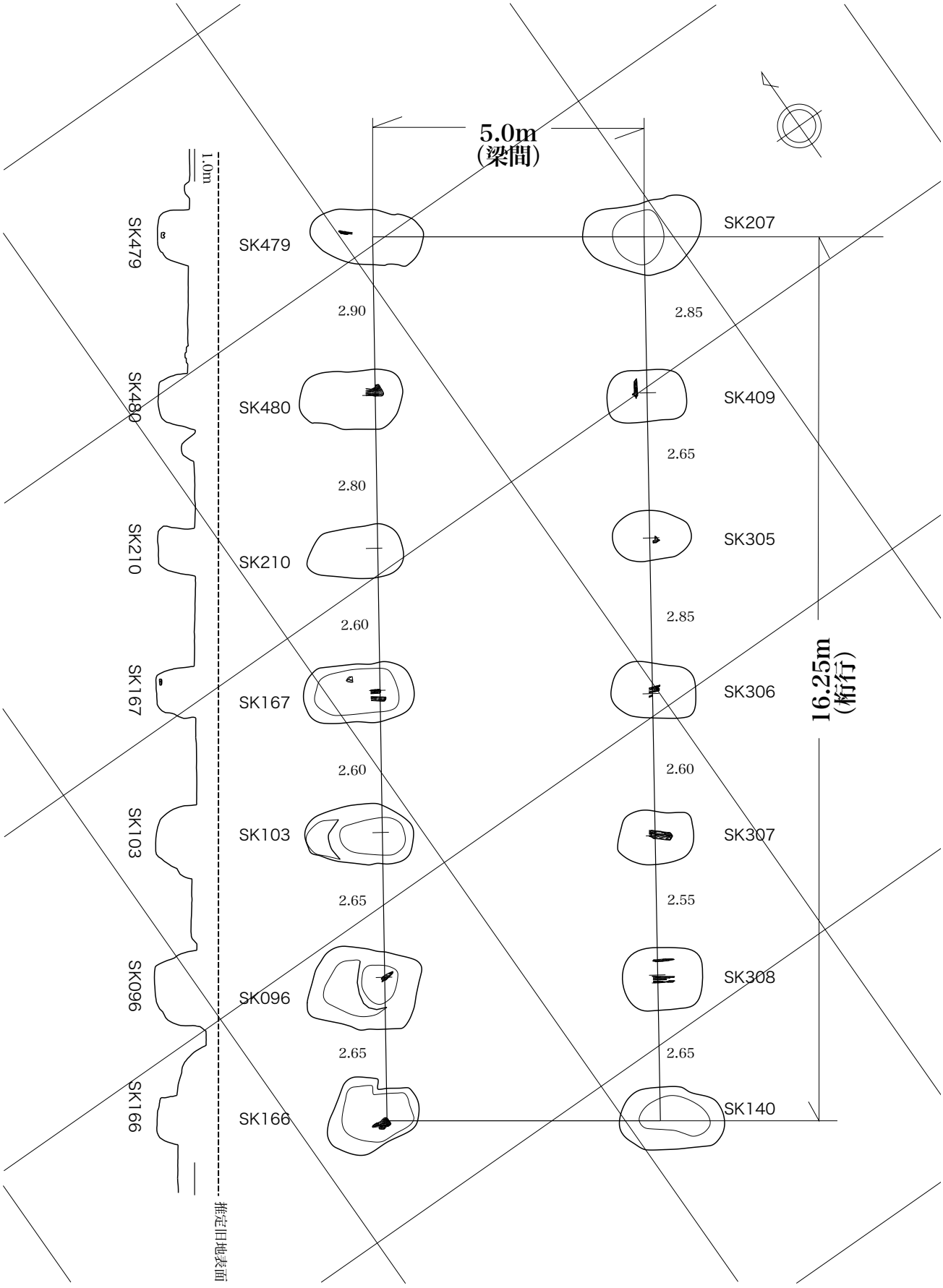
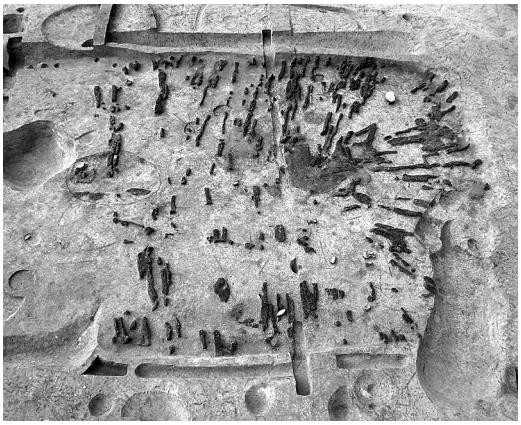
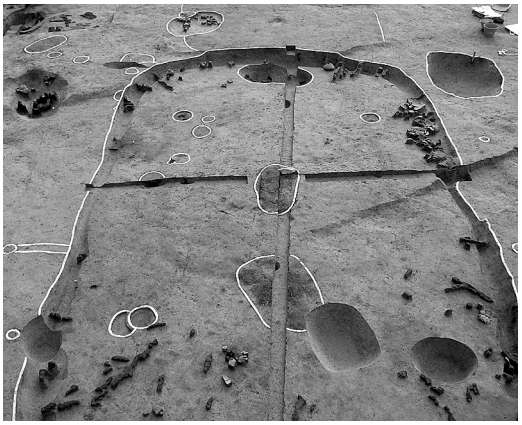


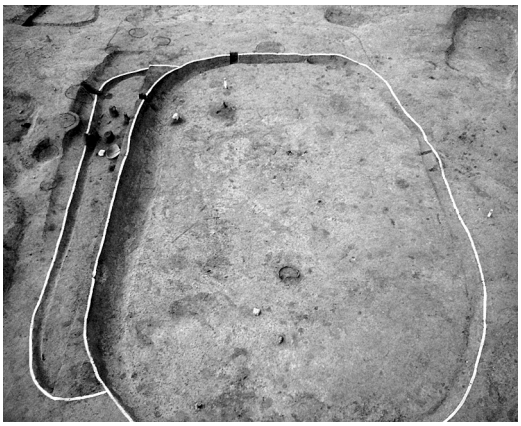
図３　大型掘立柱建物跡SB17（１：100）



大型竪穴住居跡SB18炭化材遺存状況



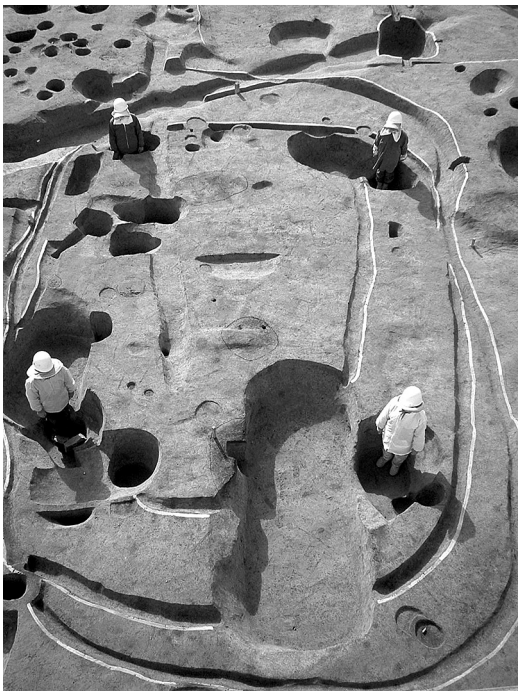
大型竪穴住居跡SB55全景（中央上寄りが立石を埋設した炉）



竪穴住居跡SB99全景（中央が土器埋設炉）



竪穴住居跡SB57全景（中央やや右寄りが立石を埋設した炉）



大型竪穴住居跡SB75全景



独立棟持柱建物跡SB77全景

朝日（あさひ）遺跡

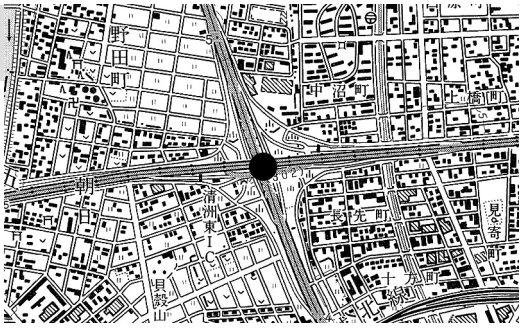
所　在　地　西春日井郡清洲町・新川町・春日町・名古屋市西区

調査理由　近畿自動車道清洲 JCT 建設
県道高速清洲一宮線建設

調査期間　平成 15 年 4 月～平成 16 年 3 月

調査面積　1,154 ㎡

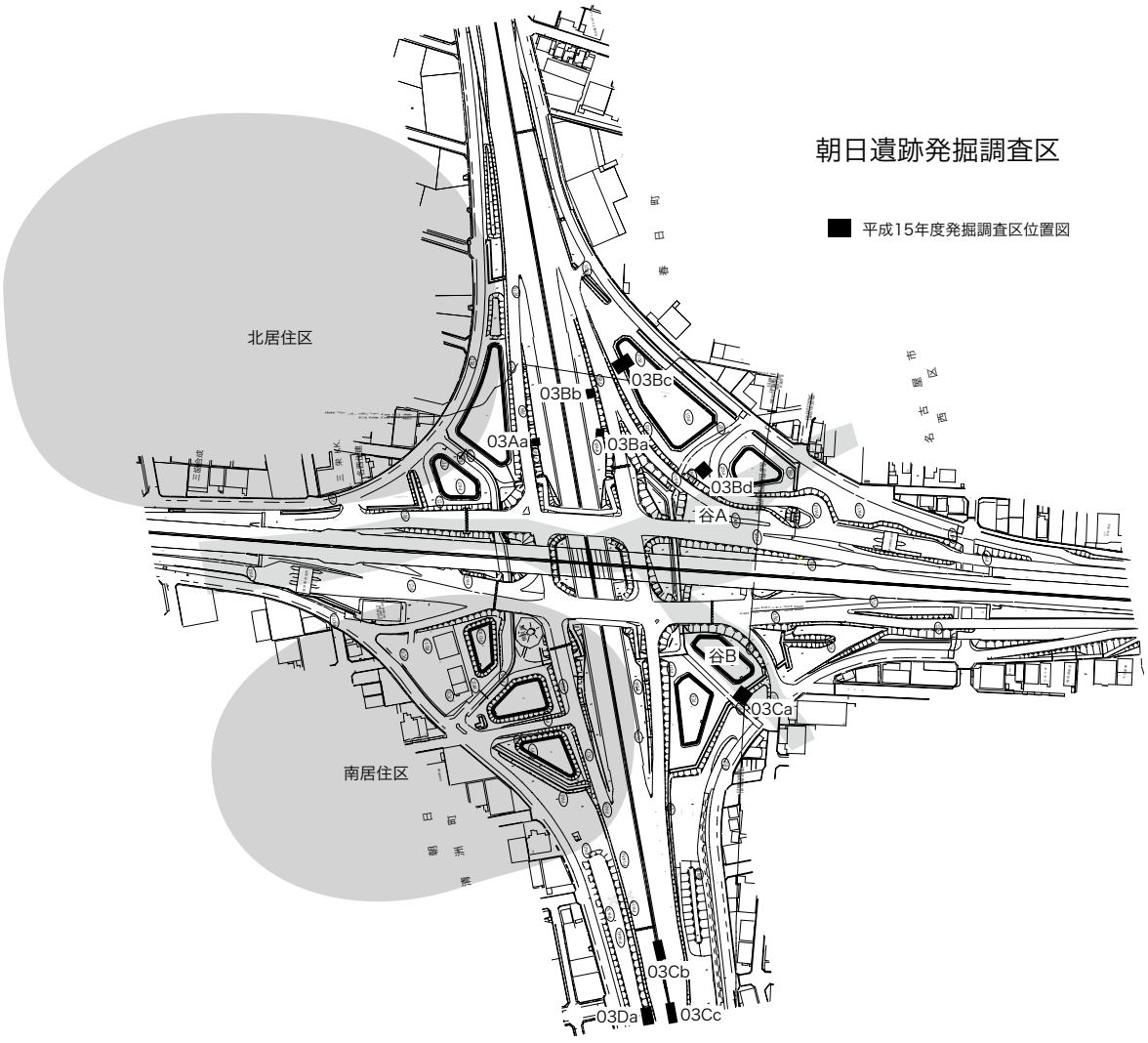
担　当　者　石黒立人・池本正明・蔭山誠一



調査地点（1/2.5 万「清洲」）

調査の経過　名岐道路建設に伴い、朝日遺跡にかかる部分について事前調査を行う必要があった。そこで平成10年度から日本道路公団・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通して委託された当埋蔵文化財センターにおいて発掘調査を実施している。今年度の調査は平成10年度年報における朝日遺跡「調査区の表記について」に準じてA区に03Aa 区の 1 ケ所、B区に03Ba 区～ 03Bd 区の 4 ケ所、C区に03Ca 区～ 03Cc の 3 ケ所、D区に03Da 区の 1 ケ所の併せて 9 ケ所の調査区を設定し、1,154 ㎡を調査した。調査期間は平成15年4月から平成16年3月である。

立地と環境　朝日遺跡は西春日井郡清洲町を中心に同春日町、新川町、名古屋市西区に広がる東海地方屈指の弥生時代集落で、現在では五条川左岸の後背湿地にあたる地域となっている。



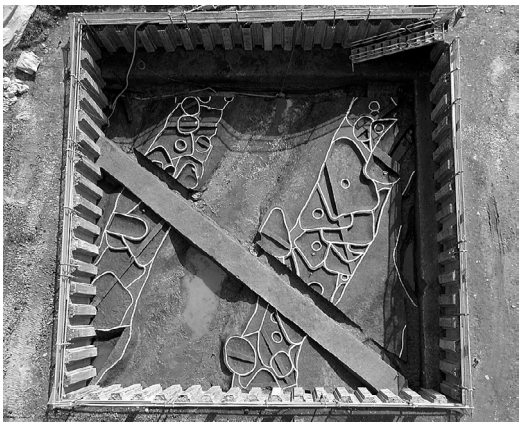
平成 15 年度発掘調査区位置図

調査の概要　03Aa 区と03Ba 区・03Bb 区は弥生時代中期中葉と弥生時代後期に「北居住区」東の環濠帯とされてきた部分にあたる。03Aa 区では弥生時代中期中葉～後葉の周溝をほぼ重複させている方形周溝墓を２基と土坑10基、中世の方形土坑３基を検出した。03Ba 区では弥生時代中期後葉の方形周溝墓１基、弥生時代後期の方形周溝墓１基、弥生時代後期～古墳時代前期の小区画水田跡９筆、弥生時代中期の竪穴住居14棟、土坑約200基、中世の方形土坑１基を検出した。弥生時代中期中葉から後期にかけて連綿と方形周溝墓が作られること、弥生時代後期の周溝が埋まった後に水田が形成されることが明らかになった。03Bb 区では弥生時代中期中葉～後葉の方形周溝墓の周溝１条とほぼ重複する弥生時代中期中葉と弥生時代後期の環濠２条、弥生時代中期前葉～中葉の竪穴住居10棟と土坑35基を確認した。この環濠は内側から４番目の環濠に対応し、弥生時代中期中葉の環濠最下部から逆茂木と思われる丸木が出土した。

03Bc 区と03Bd 区は「北居住区」の環濠帯を挟んで弥生時代中期の墓域が広がる部分で、03Bc 区では弥生時代中期中葉～後葉の方形周溝墓４基、弥生時代中期前葉～中葉の竪穴住居20棟、土坑約100基、中世の方形土坑１基等を検出した。方形周溝墓は竪穴住居等より新しいものと古いものがあり、遺跡の変遷は複雑な過程を経た可能性がある。03Bd 区では「谷Ａ」に併行して流れる弥生時代中期前葉～中葉の溝３条と古墳時代初頭の溝１条、弥生時代中期中葉～後葉の方形周溝墓の周溝７条（５基以上分)、弥生時代中期前葉の竪穴住居38棟、土坑163基を検出した。「谷Ａ」と併行する弥生時代中期の溝はこれまで２条の溝が併行してはしる可能性が指摘されてきたが、微妙に流路が交差し、その他の遺構との変遷過程が存在することから、一時期には１条の溝があったものと思われる。

03Ca 区は「南居住区」から東へ外に出た部分で、弥生時代中期中葉～中期後葉の土坑とそれらより新しい「谷Ｂ」と考えられる自然流路が検出され、古墳時代前期の廻間Ⅰ式期前後の流路と松河戸Ⅱ式期前後の流路を確認した。どちらの流路からも多量の自然流木と木製品、木材加工の痕跡と思われる木屑などが出土した。また、その流路の上層では中世の方形土坑や戦国時代～近世の水田遺構を検出した。

03Cb 区では朝日遺跡の南限と考えられる弥生時代中期後葉の溝を１条検出した。03Cb 区南側と03Cc 区では湿地性の堆積が確認され、明確な遺構はなかった。　（蔭山誠一）



Bd 区２面全景



Ca 区５面谷Ｂ

瓶子（へいじ）窯跡

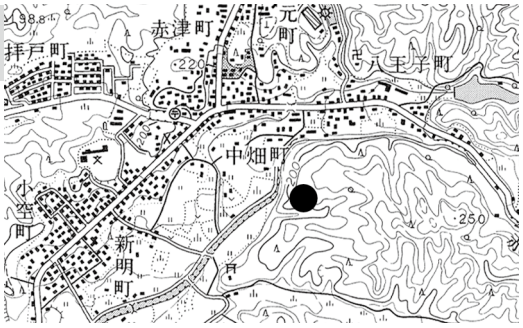
所　在　地　瀬戸市凧山町

調 査 理 由　東海環状自動車道建設

調 査 期 間　平成 15 年４月～６月

調 査 面 積　1,300 ㎡

担　当　者　藤岡幹根・武部真木



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

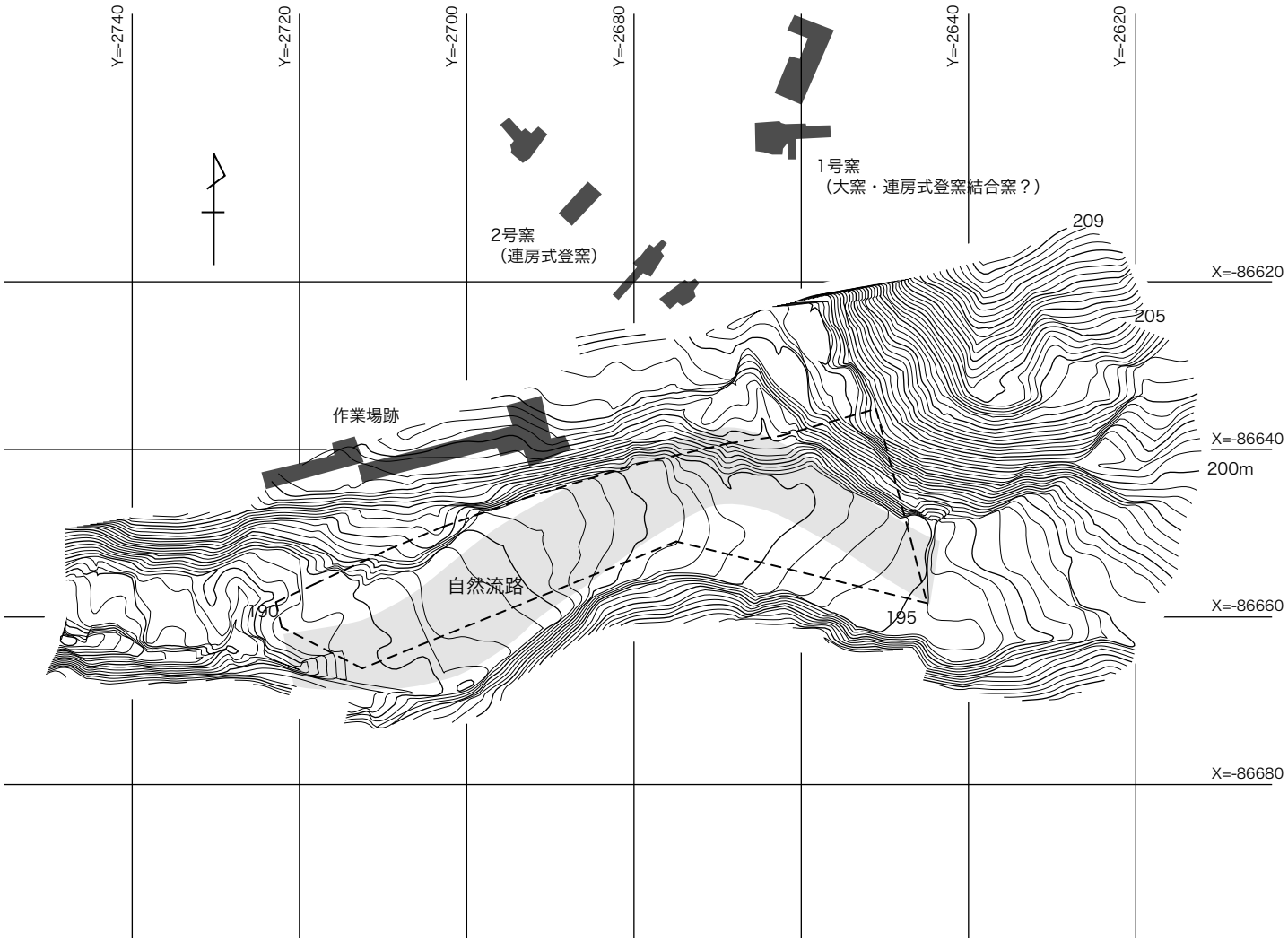
調査の経過　調査は東海環状自動車道建設に伴う事前調査として、国土交通省愛知国道事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。瓶子窯跡は矢田川の支流である赤津川左岸の丘陵地に立地する周知の窯跡であり、瀬戸市埋蔵文化財センターによって平成10･11年度に窯体と周辺の試掘調査が行われた結果、17世紀半ば～後葉にかけて操業した連房式登窯と大窯・連房式登窯結合窯の計2基の窯体、および作業場とみられる平坦面などが確認されている。

調査の概要　今回の調査地点は、窯体からやや離れた灰原（物原）末端と想定される位置にあたり、現況は山林と湿地状を呈する谷であった。近世段階の谷底検出面は窯体焚口の最も低い部分からは約13m、作業場とされる平坦部より約1.5mの比高差を測る。東西方向に伸びる谷地形であり西側で赤津川に流れ込む。谷の幅は広いところで約8m あり、調査区は窯体方向から崩落した灰原の堆積する緩斜面と、谷底の自然流路の大きく2つに分けられる。

灰原部分は盗掘坑とみられる大小の撹乱が夥しく、操業期に関わる堆積状況を捉えることは困難な状況であった。灰原に含まれる大量の製品と窯道具には、茶入、丸碗、天目茶碗、皿、擂鉢、花瓶、徳利、銭甕、匣鉢、トチ、エブタ、焼台、窯体の一部などがある。また、一部資料には鉄釉で書かれた文字がみられる。多くは3㎝角程度の製品破片に収まるように「あさ」「平」「大」など1～2文字である場合が多い。その他に匣鉢内部にも文字がみられる。これらには「色見」が含まれていると思われるが、意図が不明なものも多い。その他にロクロ成形の小型土師器皿が少量ではあるが、斜面上方で検出されている。

谷断面では表土・水田耕作土層が水平堆積し、その下は粗～細粒砂層、腐植質を多く含むシルト、粘土、泥炭層などの互層となり河川性の堆積がみられる。近世段階の自然流路の堆積層は、中央部分が急激な水流によって流出しているため、流路両端に分かれて残存する。ここからは夥しい破片とともに、完形に近い残存状況の良い製品も多く出土している。後者は茶入、擂鉢、銭甕など、地点によりそれぞれ集中する器種が偏る傾向が認められる場合があり、窯詰の方法あるいは製品選別に拘わる廃棄状況を示しているものと思われる。その他に当時の工人の使用したキセル2個体が出土している。

ま　と　め　調査は窯体から若干距離をおいた地点であったにも拘わらず、採取した製品と窯道具類は総量コンテナ800箱を超えている。操業当時に廃棄されその後流出した谷中央部分の堆積量を加えずとも、膨大な生産規模が窺われる。ここでは遺構は全く検出されなかったが、製品の他にも各種窯道具、工人の所持品など生産の状況や方法など生産内容の究明に有用な資料が多く含まれており、特に当該時期の窯業遺跡については、窯体以外にも周辺を広く含めた調査範囲設定の必要性を示すものとなった。（武部真木）



瓶子窯跡周辺現況測量図（1：800）（破線で示す部分が今回の調査区）



調査区全景



キセル出土状況



谷埋土中の遺物出土状況



内部に漆器碗の入った匣鉢

惣作（そうさく）・鐘場（かねば）遺跡

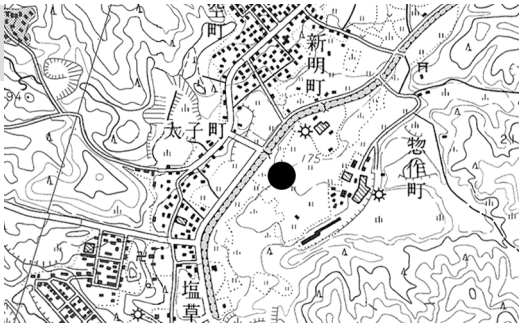
所　在　地　瀬戸市惣作町、鐘場町地内

調 査 理 由　県道瀬戸設楽線建設

調 査 期 間　平成 15 年 7 月～平成 16 年 3 月

調 査 面 積　4,850 ㎡

担　当　者　藤岡幹根・酒井俊彦・鵜飼雅弘・武部真木



調査地点（1/2.5 万「瀬戸・猿投山」）

調査の経過　調査は県道瀬戸設楽線建設のため愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成12年度より実施している。平成12年度は遺跡範囲の南部、平成13・14年度は南部および北部の調査を行った。先年度までの延べ調査面積は15,700㎡である。これまでの調査によって後期旧石器時代末から近世までの遺構・遺物が検出された。今年度は、遺跡北部、中央と南部に各１調査区を設定して調査を実施した。

立地と環境　惣作・鐘場遺跡は瀬戸市東部の惣作町・鐘場町に所在し、矢田川支流である赤津川の左岸の標高170m前後の2段よりなる洪積河岸段丘上に立地する。遺跡は赤津川と門前川を西限及び南限とし、北側と東側は山地を北限及び東限とする。遺跡範囲の北部は大目神社の所在する山塊からのびる尾根状の段丘上に位置し、惣作川を挟んで地形的に2つに別れる。周辺には南側に太子縄文遺跡、太子遺跡、北東部の山地部に大目神社古墳、巡間Ｅ窯跡、瓶子窯跡、凧山Ｃ窯跡、凧山窯跡、凧山屋敷遺跡、凧山Ａ窯跡、赤津川上流に長谷口遺跡、八王子遺跡がある。

調査の概要　今年度の調査区として、遺跡範囲の南部00A区と01B区の間に03A区、中央部に03B区、遺跡北部の02A区の東側に03C区を設定した。

03A区　北東から南西にのびる上位段丘面上に位置する。西側は下位段丘に移行する傾斜地、東側は門前川の河谷である。旧地形は段丘の最上部の平坦面を中心にした緩やかな傾斜地であるが、現状では階段状の耕作地となっている。

検出された遺構は古墳時代後期及び中世から近世にかけての時期に属する。古墳時代後期７世紀代の竪穴住居１棟が検出された。遺存状況は悪く、須恵器などの少量の遺物が出土した。中世については、調査区北部で現道に沿う位置に13世紀から15世紀の時期の溝１条を検出した。また、調査区南部の段丘端部で近世の溝２条、土坑１基を検出した。

03B区　上位段丘面の頂部を中心にした位置にある。東側は、門前川の河谷の傾斜地に面する。西側は下位段丘面に向かう緩やかな傾斜地である。調査区の西部は近年の耕地整理によって階段状に削平されており、基本層序として現耕作土下が段丘の基盤面となる。出土遺物としては、縄文時代から戦国時代の遺物が検出されたが、主な遺構の時期は、弥生時代後期、古墳時代後期、中世および戦国時代である。

弥生時代後期については、調査区北部に土坑２基を確認した。SK141からは比較的まとまって遺物が検出された。

古墳時代後期は、６世紀前半から７世紀後半までの時期に属す竪穴住居址14棟を確認した。近年の削平によって遺存状況が悪いものもあるが、全体に掘り方が深く、遺物の残存状況の良好な竪穴住居址がある。竈の遺存状況は悪く、構造が判明する良好なものは

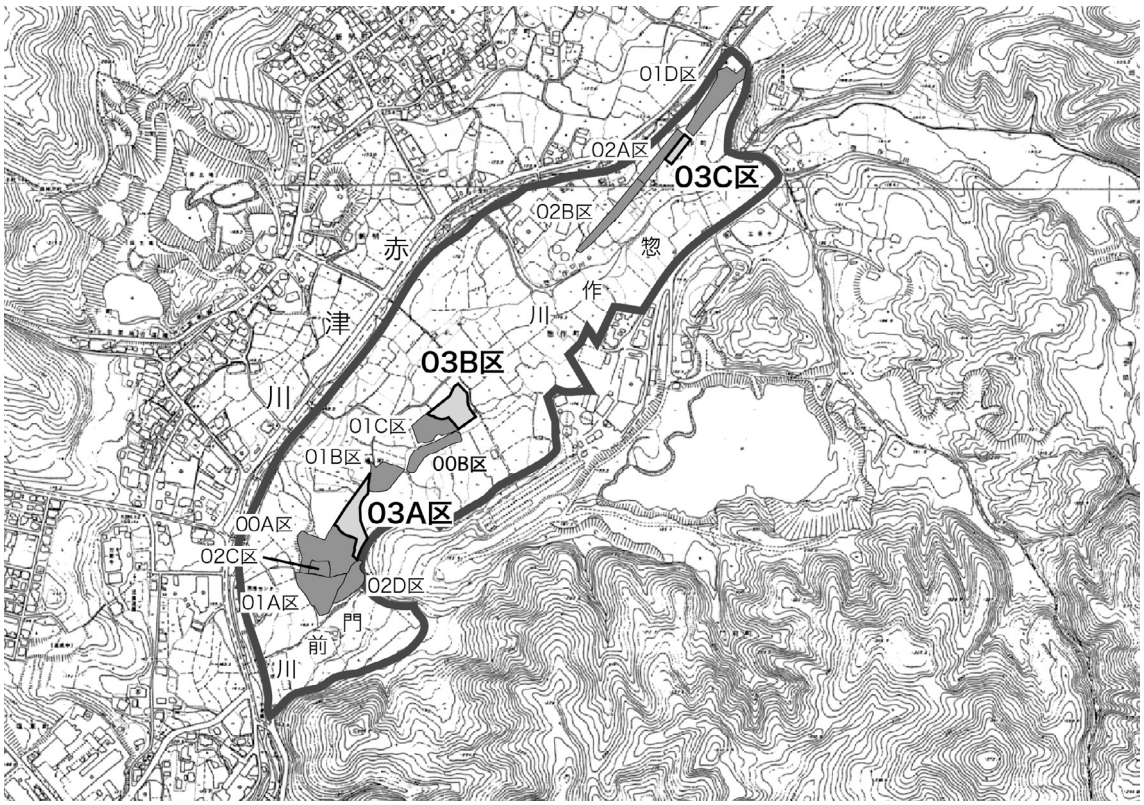
ない。焼土、粘土、炭化物が塊状に集中しているものが多い。竈の位置は、検出できたもので北辺あるいは北西辺にあるが、SB05は南東辺にある。SB01・09は竈の張り出しが認められる。柱穴は明瞭に認められるものは少ないが、床面に比較的深い掘り方をもつものがある。周溝は大部分の竪穴住居址で認められた。SB03は遺物の遺存状況が比較的良好で、北東辺の中央部分と東隅で完形に近い土師器甕の個体が床面上で検出された。また、竈付近及び床面直上より須恵器杯、土師器甕などが比較的多量に出土した。竪穴住居の時期的変遷については詳細は不明であるが、２～４棟が同時に存在したことが推定される。

中世については13世紀代の井戸 (SE01) が確認された。内部に方形の井戸枠の痕跡が検出された。調査区全体にこの時期の小土坑が検出され、掘立柱建物群が展開することが予想される。また、戦国時代の大型の土坑２基 (SX01・02) を検出した。平面形及び掘り方は不定形である。埋土はブロックの斑土で、埋め戻しが行われている。瀬戸窯産施釉陶器より16世紀前半の時期と考えられる。

調査区東隅の自然地形の落ち込み中の縄文時代中期の包含層より深鉢１個体が検出されたが、調査区内で自然地形のわかる範囲が狭いため今後の検討が必要である。

03C区　大目神社古墳の所在する丘陵より延びる段丘の上位段丘面及び下位段丘面に相当する。主な遺構としては古墳時代後期７世紀代の竪穴住居１棟を検出した。近年の耕作による削平が著しく遺存状況は悪い。少量の須恵器、土師器が出土した。

ま と め　昨年度までの調査では、古墳時代後期は７世紀代のみの竪穴住居が確認されてきた。今回の調査では６世紀代の時期の集落が検出され、遺跡全体では古墳時代全般に集落が展開することが確認された。今後は、同時期の周辺遺跡の動向を含めて集落の消長を検討する必要がある。　（酒井俊彦）



調査区位置図（１：10,000）



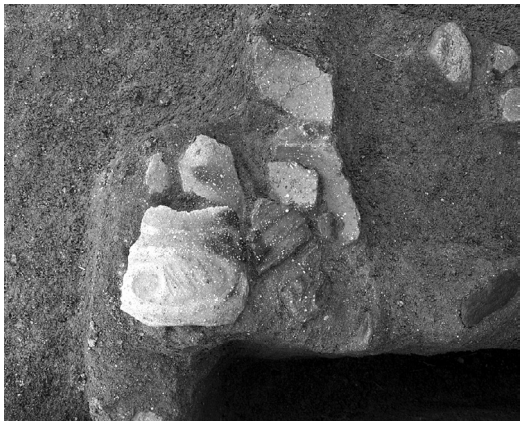
03Aa区全景（南より）



03B区全景（南西より）



03C 区全景（南西より）



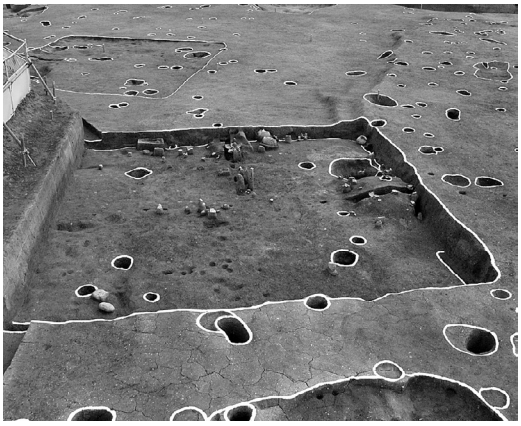
縄文土器出土状態（03B区）



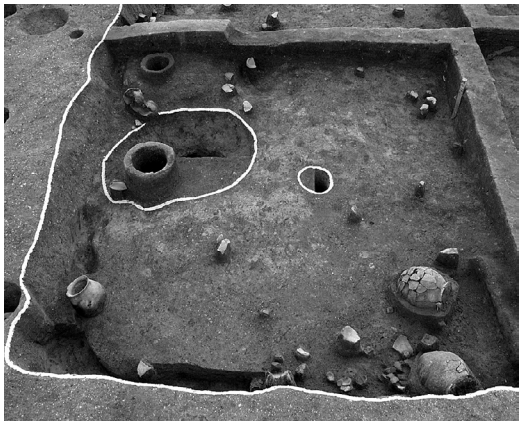
縄文土器出土自然地形（03B区）



古墳時代竪穴住居址群（03B区）



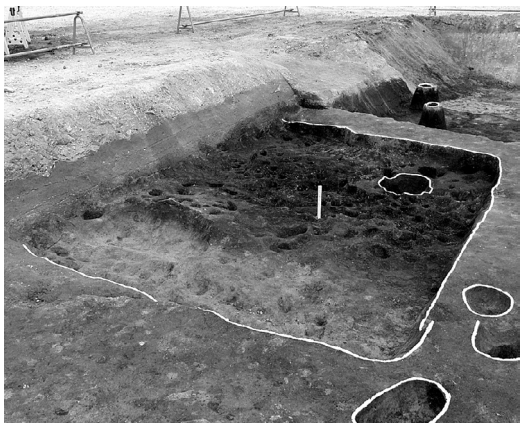
03B区SB03遺物出土状況（南西より）



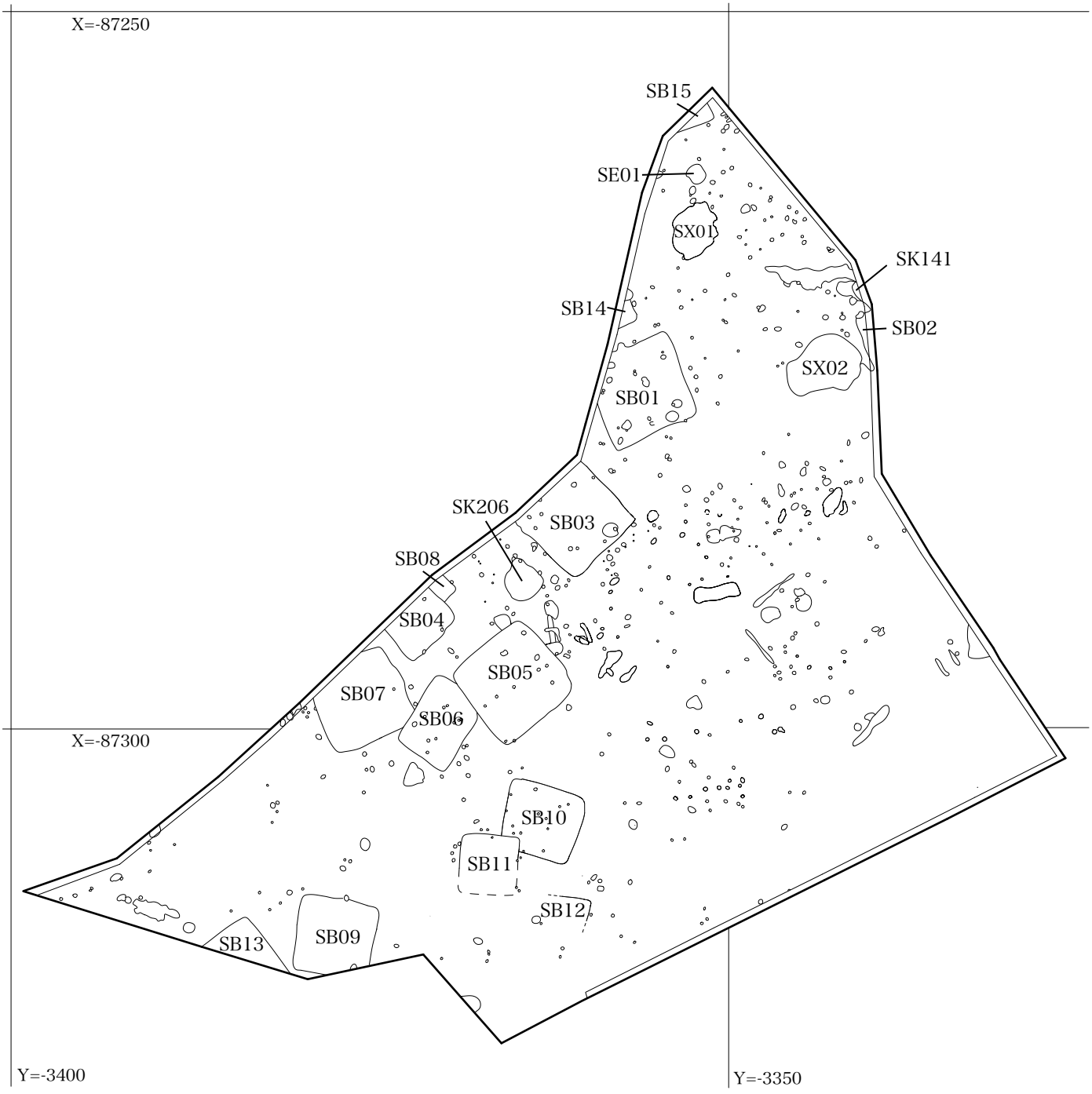
03B区SB03遺物出土状況（北東より）



03B区SB03土師器甕出土状況



03C区SB01完掘状況（東より）



03B区遺構平面図（1：400）

万徳峠窯跡（まんとくとうげ）

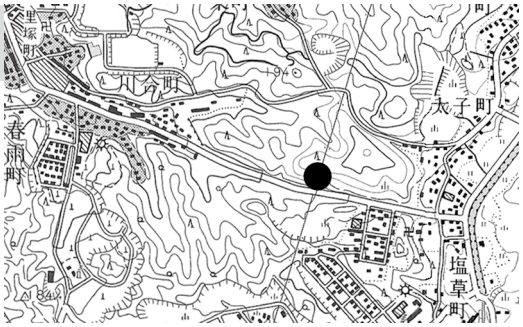
所　在　地　瀬戸市川合町地内

調 査 理 由　主要地方道瀬戸設楽線道路改良

調 査 期 間　平成 15 年 8 月～ 12 月

調 査 面 積　1,000 ㎡

担　当　者　藤岡幹根・酒井俊彦・鵜飼雅弘



調査地点（1/2.5 万「瀬戸・猿投山」）

調査の経過　万徳峠窯跡は、瀬戸市川合町地内に所在する。調査は主要地方道瀬戸設楽線道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より委託を受け、平成15年8月から12月にかけて実施した。調査面積は1,000㎡である。

遺跡の立地　遺跡は菱野丘陵東部、市道塩草線万徳峠から西に展開する谷の北側標高約173ｍに位置する。周辺には川合Ｃ窯跡・川合Ｄ窯跡・川合Ｆ窯跡・太子Ａ窯跡など中世の山茶椀・施釉陶器の窯跡が集中する。また赤津川を隔てた対岸には、縄文時代から近世の複合遺跡である惣作・鐘場遺跡がある。

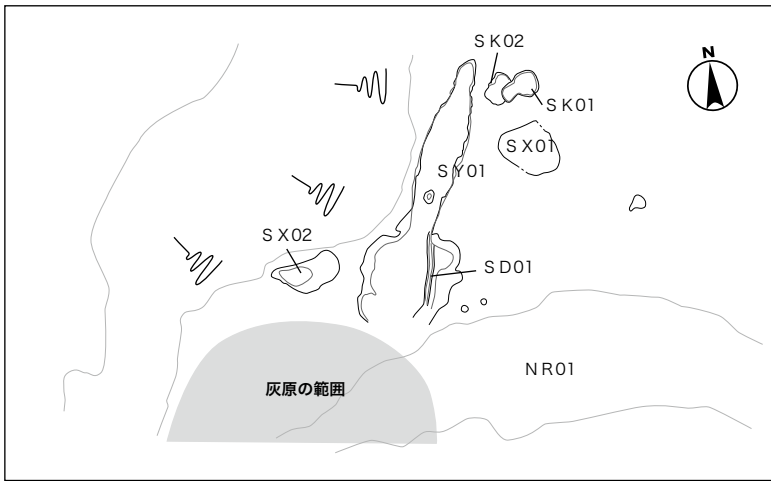
調査の概要　調査は盛土を除去し、窯体及び灰原の範囲を確認しながら行った。その結果分焔柱を有する窖窯１基（SY01）、および作業場と考えられる遺構を確認することができた。SY01は西に展開する谷（NR01）に向かって立地し、花崗岩の岩盤をくりぬいて構築されている。焚口から煙道までの全長は9.5ｍ、中軸線はN-24°Eを測る。平面形はすべて残り、焚口で幅1.1m、分焔柱付近で幅1.7ｍ、焼成室の最大幅は2.2mを測る。煙道部から焼成室まで22.5°と一定の傾斜を保ち、分焔柱から焚口までは19°とやや緩やかになる。

前庭部の最大幅は5.0ｍを測る。一部は撹乱を受けているものの、２面の整地層を確認した。また窯体に対し右側に排水溝（SD01）が伸びている。焚口の壁面は垂直に立ち上がり、床面直上では炭化物が認められた。分焔柱は高さ30㎝を残し、焼成室側では粘土による補修痕が残る。焼成室は全長6.1ｍ、煙道に近い部分では天井の一部が崩落した状態で検出された。さらに天井を取り除くと、最終焼成時の馬爪型焼台が遺物とともに現位置を留めていた。焼台の分布をみると、分焔柱に近い部分では山茶椀のものが多く、その上部では小皿が目立つ。また窯体の断ち割りの結果、床面は少なくとも１回以上の補修を受けていることを確認した。煙道の長さは1.8m、ダンパー付近の幅は0.9ｍを測る。煙道は先端部までを確認することができたが、ダンパーは流失していた。

灰原は前庭部からNR01に向かって広がり、灰釉四耳壺・山茶椀・小皿・窯道具などが出土した。NR01は全体に２次堆積の様相を示し、上層は盛土や撹乱の影響を受けている。しかし下層では灰釉四耳壺・瓶子・水注・山茶椀・小皿・窯道具などの遺物、焼台が出土した。

SY01周辺の遺構としては、作業場と考えられる遺構を２ヵ所確認することができた。そのうちSX02は、焼成された山茶椀を覆うように、粘土を敷き詰めた状態で検出された。またSK01・SK02では、炭化物・焼土を含むシルト層から山茶椀、水注の破片が出土した。

ま　と　め　SY01最終焼成時の出土遺物として、山茶椀・小皿・仏供具・入子が挙げられる。また灰原から出土した四耳壺・山茶椀が古瀬戸前期の様相を示すことから、この窯が山茶椀・古瀬戸を併焼していたことが明らかになった。今回の調査により、川合地区における中世窯業生産の実態を示す１資料が加わったと位置付けることができよう。　（鵜飼雅弘）



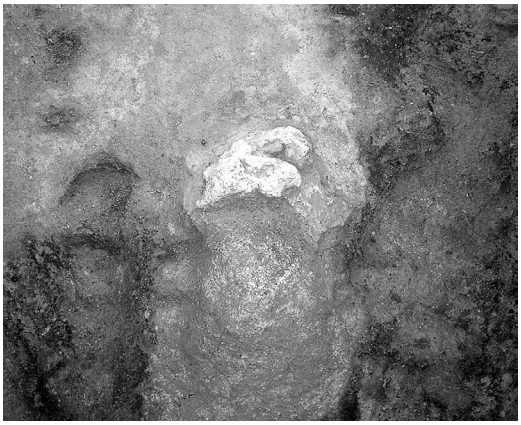
主要遺構配置図（1：400）



SY01完掘状況（南から）



SY01煙道（南から）



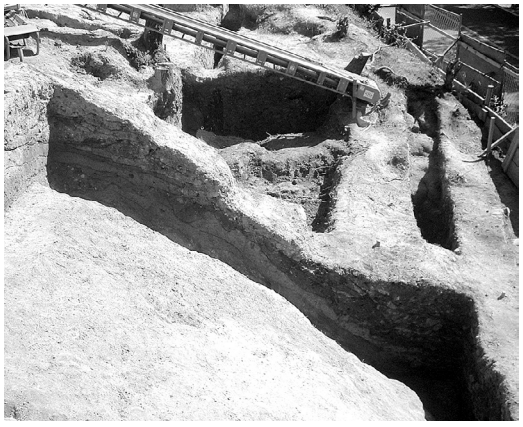
SY01分煙柱



SY01焼台出土状況



SX02粘土検出状況（西から）



灰原堆積状況（西から）

川合（かわい）D窯跡

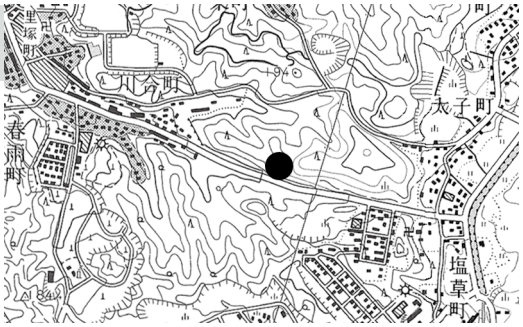
所　在　地　瀬戸市川合町地内

調 査 理 由　主要地方道瀬戸設楽線道路改良

調 査 期 間　平成 15 年 10 月～ 12 月

調 査 面 積　250 ㎡

担　当　者　藤岡幹根・酒井俊彦・鵜飼雅弘



調査地点（1/2.5 万「瀬戸・猿投山」）

調査の経過　川合D窯跡は、瀬戸市川合町地内に所在する。調査は主要地方道瀬戸設楽線道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より委託を受け、平成15年10月から12月にかけて実施した。調査面積は250㎡である。

遺跡の立地　遺跡は菱野丘陵東部、市道塩草線万徳峠から西に展開する谷の北側標高約164ｍに位置する。周辺には万徳峠窯跡・川合Ｃ窯跡・川合Ｆ窯跡・太子Ａ窯跡など中世の山茶椀・施釉陶器の窯跡が集中する。また赤津川を隔てた対岸には、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である惣作・鐘場遺跡がある。

調査の概要　調査の結果、南南西方向に伸びる沢に灰原が形成されていることが確認された。灰原は約１ｍに渡り堆積しているが、上部は治山工事や度重なる盛土造成により削平されている。また、灰原の南側は道路建設時に削られている。灰原の形成は大きく２時期に分かれる。下層では南部系山茶椀・山皿、片口鉢など、さらに最下層の灰白色シルト層からは灰釉四耳壷・瓶子が未焼成の状態で出土した。出土遺物から13世紀後半から14世紀前半にかけて操業していたと考えられる。上層では匣鉢とともに天目茶碗、灰釉四耳壺、花瓶、柄付片口などが出土した。出土遺物から14世紀、いわゆる古瀬戸中期末の様相を示すが、出土遺物に現代のものを含むため、二次堆積の可能性が高い。

ま　と　め　出土遺物から、窯跡は13世紀前半から14世紀半ばの間、複数の窯の操業を想定する結果を得た。窯体については調査区内で確認することができなかったものの、埋積土中に窯体の破片を含む層があることから、一部もしくは全体が破壊されている可能性がある。

（鵜飼雅弘）



灰原完掘状況（南から）


古瀬戸前期四耳壺出土状況

Ⅰ-G-2号窯跡

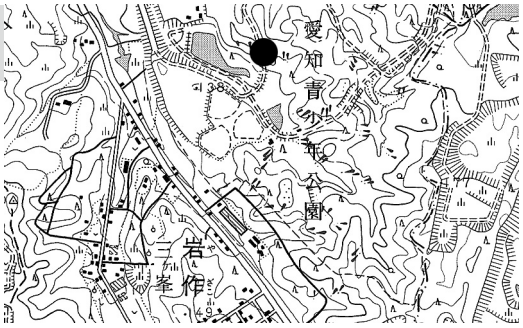
所　在　地　愛知郡長久手町岩作地内

調 査 理 由　公園緑地整備事業

調 査 期 間　平成 15 年 4 月～ 7 月

調 査 面 積　350 ㎡

担　当　者　藤岡幹根・酒井俊彦・鵜飼雅弘



調査地点（1/2.5 万「平針」）

調査の経過　調査は公園緑地整備事業に伴う事前調査として、愛知県建設部公園緑地課より委託を受けて、平成15年４月から７月にかけて実施した。調査面積は350㎡である。

遺跡の立地　Ⅰ-G-２号窯跡は日進市・豊田市と境を接する、愛知郡長久手町岩作に所在する、愛知県青少年公園の敷地内にある。周辺にはⅠ-G-６号窯をはじめとする三ヶ峯古窯跡、神明社古墳群などがある。窯跡は香流川右岸、北西に向けて延びる丘陵の北斜面に立地し、標高約139ｍを測る。なお調査地点には調査直前まで、園路に伴う休憩施設があった。

調査の概要　今回の調査では、分焔柱を有する窖窯を３基確認することができた。窯体はいずれも焼成室より上部で削平を受けており、焚口から焼成室の一部までの調査となった。

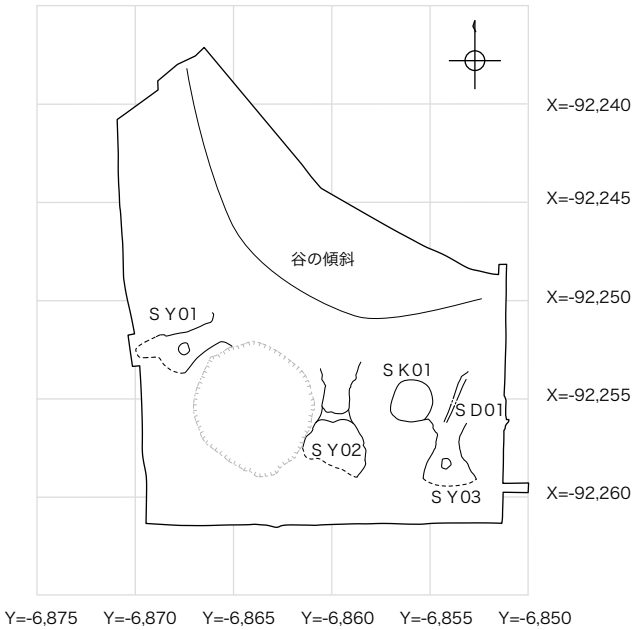
SY01は残存長約５ｍ、分焔柱付近の幅は約2.6ｍを測る。焼成室の平均斜度は約19° 分焔柱から焚口にかけての平均斜度は約1°である。分焔柱は約33㎝の高さまで残り、地山をくりぬいて構築されている。焼成室の床面は１回の補修を確認することができる。

SY02は残存長約6.7ｍ、最大幅は約3.5ｍを測る。焼成室の平均斜度は約23° 床面の補修が少なくとも１回行われている。馬爪型焼台が一部焼成時の現位置をとどめていた。分焔柱は天井部までを残し、分焔孔も良好な状態で観察できた。

SY03は残存長約4.1ｍ、分焔柱付近で約2.9ｍを測る。焼成室の平均斜度は約15あり、焚口までほぼ同じ傾斜を保つ。床面に補修の跡が見られ、分焔柱及び焚口を山茶椀が釉着した塊を埋め込んで補強している。また焚口西側に作業場と考えられるSK01がある。

出土遺物は13世紀半ば頃の山茶椀及び山皿が中心であるが、SY01付近では土師質の鍋が出土している。なお調査後、窯体構築時に排出した土砂を用いて前庭部を構築したことが確認され、SY01・02とSY03との間に操業時期の差があったことが確認できた。

（鵜飼雅弘）



Ⅰ-G-2号窯跡主要遺構配置図（１：800）


SY02完掘状況（南から）

西田面（にしだめん）遺跡

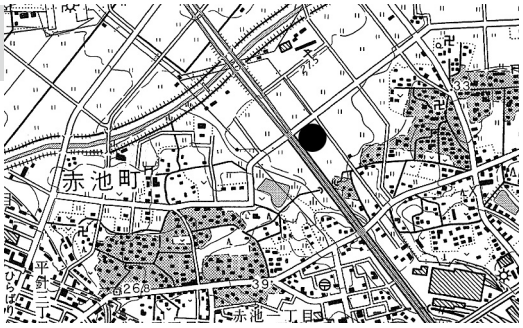
所　在　地　日進市浅田町地内

調 査 理 由　岩崎名古屋線建設

調 査 期 間　平成 16 年 1 月～２月

調 査 面 積　1,000 ㎡

担　当　者　藤岡幹根・永井宏幸



調査地点（1/2.5 万「平針」）

調査の経過　調査は、岩崎名古屋線建設の事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成16年１月から２月にかけて実施した。調査面積は1,000㎡である。

立地と環境　西田面遺跡は日進市の西部、浅田町地内に所在する。現在の国道 153 号線バイパス浅田町交差点の南東に位置し、天白川左岸域に展開する沖積地に立地する。現地標高は27ｍ前後を測る。隣接する遺跡としては、古代から中世にかけての遺構・遺物を確認した三ケ所遺跡が500ｍ北東にある。

調査の概要　調査の結果、古代から近世にかけての遺構・遺物が確認された。

古代の遺構としては、土坑が3基、確認された。そのうち、SK04は須恵器長頸瓶が逆位に埋設された状態で見つかった。

中世の遺構としては、竪穴状遺構1基と土坑・ピット数基、東西方向と南北方向に延びる溝群が、調査区を横断するように確認された。これらの遺構はほぼ磁北に合わせた配置となり、自然地形に左右されない計画的な掘削が予想される。竪穴状遺構SB01は長軸方向の中軸線上に並ぶ柱穴が3ケ所ある。また火所がなく、通常の竪穴住居と異なった性格が見いだせる。つまり、簡易的な構造を持つ作業小屋として捉えたい。このSB01に東接するSD10からは、尾張第7～8型式の灰釉系陶器を中心におびただしい量の陶器類が廃棄されていた。

遺跡の性格としては、屋敷地など居住域と考えるよりは、水田など生産域に関連した磁北を意識した計画的な空間、つまり中世条里制遺構が推定できる。　（永井宏幸）


B区全景


SB01

高木（たかぎ）遺跡

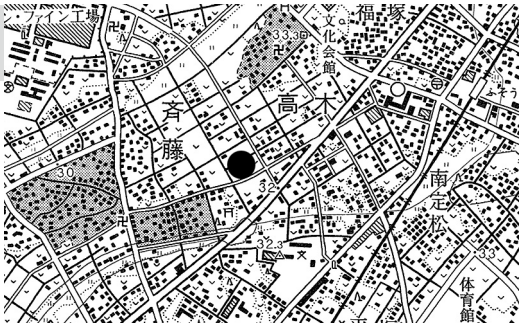
所　在　地　丹羽郡扶桑町高木

調 査 理 由　県道草井・羽黒線建設

調 査 期 間　平成 15 年 7 月～ 11 月

調 査 面 積　2,700 ㎡

担　当　者　藤岡幹根・武部真木



調査地点（1/2.5 万「犬山」）

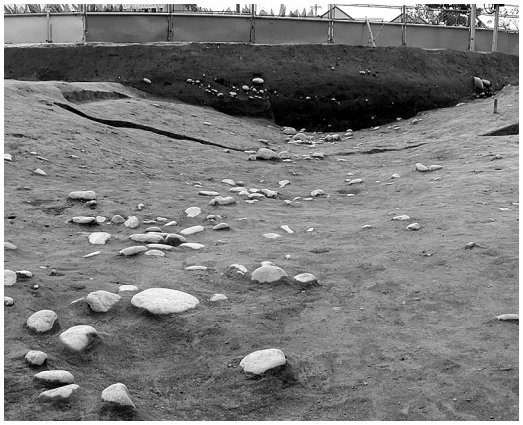
調査の経過　本遺跡は県道草井・羽黒線建設に伴う事前調査として愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成15年7月～11月の期間で調査を行った。調査面積は計2,700㎡であり、A・B・C・Dの4調査区に分割して進めた。

調査の概要　扶桑町は犬山市の南西方向にあたる扇状地帯にあり、調査範囲は微高地を横断する形となる標高28～32mの地点であり、西端は木曽川の支流（一之枝）であった旧河道に画される。木曽川にかけて周辺一帯の砂を多く含む土壌では、江戸時代は多くが桑畑であったが、近代以降今日まで守口大根や牛蒡などの生産が盛んであり、その特殊な栽培方法によって地表から約1～1.5mの深度まで溝状に撹拌されている。その結果、かつて畑地であった箇所では包含層および遺構の残存状況が極めて悪く、また、種芋等を貯蔵するための通称「イモアナ」と呼ばれる0.6× 1m前後、深さ1.5m規模の方形土坑が今日まで多数掘削されている。こうして撹拌された耕作土中には、須恵器、東濃産山茶椀、瀬戸・美濃産陶器、近世陶磁器、近現代陶磁器類が含まれるが、すべて小片となっている。

近世以前の遺構は、旧流路から離れるB・C・D区で確認された。C区では幅2～3m、深さ50～80㎝の溝がめぐる一辺10m規模の古墳と思われる方形の区画があり、遺物は検出されなかったが、B区で見つかった同様の規模と埋土の溝下層から古墳時代の土師器台付甕、須恵器壺、杯が出土している。D区では奈良時代の旧流路、これに重複する地点で幅約5m、深さ90㎝の平安時代の溝、さらに溝埋積後のその上に鎌倉・室町時代の集石遺構がある。集石は大小の河原石からなり、一辺約4mの方形部分とこれに沿って帯状に伸びる幅30㎝位の部分が認められ、石の間からは14～15世紀代の東濃産山茶椀、片口鉢、古瀬戸折縁皿、四耳壺片などが出土した。

以上のように大型の遺構を検出することができたものの、調査範囲全般に生活感が希薄であった。これが削平を原因とするものでないとすれば、墓域や耕作地など集落周縁の空間であったと思われる。（武部真木）


03C区　方形区画溝


03D区　平安時代溝

細田（ほそだ）古窯群

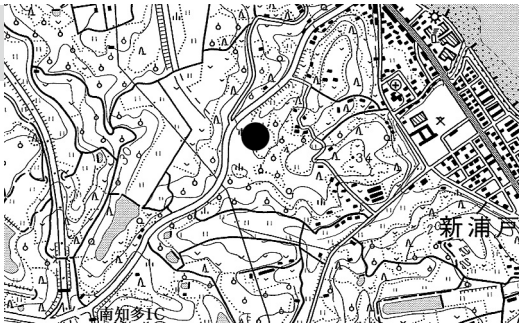
所　在　地　知多郡美浜町河和地内

調 査 理 由　県道半田南知多線

調 査 期 間　平成 15 年４月～７月

調 査 面 積　900 ㎡

担　当　者　小嶋廣也・松田　訓



調査地点（1/2.5 万「河和」）

調査の経過　調査は県道半田南知多線建設工事に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成15年４月から７月にかけて実施した。調査面積は900㎡である。

立地と環境　細田古窯は知多半島南部に位置し、東西の海岸に町域を広げる美浜町の中で、東岸の河和集落から南知多町内海に通じる道を、半島中央部に連なる丘陵地側へ登った小谷に立地する。知多半島は、細田古窯のように灰釉系陶器（山茶椀）の生産地として著名であるが、調査地点は知多半島に所在する古窯址群の中でも、ほぼ南端に位置する。調査地点の旧態は果樹園、畑地で、周辺は果樹園、雑木林、竹林が広がる。

調査の概要　調査区は、斜面に平坦地を確保するため段状に造成されており、この果樹園跡に設定された。旧地形は、調査区中央に小谷の最深部が南北方向で通っており、これをはさんで東西にそれぞれ窯体が確認できた。検出された遺構は窯跡3基で、同時に灰原も確認できた。窯跡は、小谷最深部の西側に２基が並行して築かれており、この２基は、南向き斜面を北へ上る方向で掘削されていた。小谷最深部東側では、これとやや方向を変え東側に上る方向で掘削されており、小谷最深部を中心として扇形に３基が展開する。いずれの窯体も、造成時にほとんどの部分が削平されており、床面と窯壁・分焔柱の一部を確認できるのみであった。３基とも、床面下施設は伴わないものと思われる。出土遺物は、いわゆる山茶椀と皿で、いずれも12世紀後半～13世紀前半のものと思われる。（松田　訓）


SY01


SY03

小針（こばり）遺跡

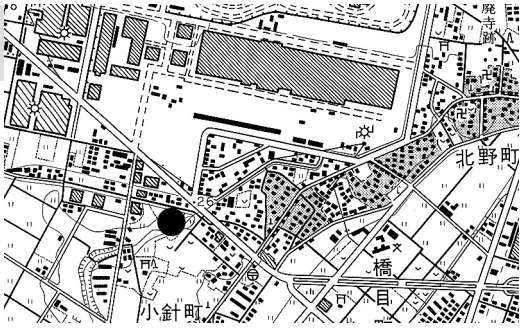
所　在　地　岡崎市小針町地内

調 査 理 由　県道名古屋岡崎線

調 査 期 間　平成 15 年 7 月～ 12 月

調 査 面 積　2,100 ㎡

担　当　者　小嶋廣也・松田　訓



調査地点（1/2.5 万「岡崎」）

調査の経過　調査は県道名古屋岡崎線建設工事に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成15年7月から12月にかけて実施した。調査面積は2,100㎡である。

立地と環境　小針遺跡は、矢作川中流部に市域を広げる岡崎市の中で、右岸に広がる沖積平野と、この西側に広がる碧海台地との段丘崖台地側に立地する。調査地点の旧態は畑地で、周辺は住宅地が広がる。

調査の概要　調査は、道路建設予定地に合わせ、東西方向に展開して設定された。この調査区を、周辺民家への侵入路確保のため西側半分を南北（A・B区）に分け、東側半分（C区）とあわせて三分割し、順次作業を進めた。調査地点の基本層序は、旧耕作土、客土の下に灰褐色シルトが入り、その直下に遺物包含層である暗褐色シルトが堆積し、基盤と思われる更新統の赤土がみられた。調査区東端では､河川の影響による粗粒砂層が認められた。

今回の調査で確認された遺構は、遺物の伴うものが少なかった。確認できたものに限れば、戦国時代以降のものと思われる溝を除いて、土坑、小穴、竪穴住居などは、7世紀前半を主体とするようである。竪穴住居跡は、調査地点内において約20を数えたが、多くのものは床面の北側中央部で、カマド跡と思われる焼土が認められた。多量に検出された小穴は、遺構間の相対関係を検討中である。これらの遺構は、出土遺物が少ないものの当該期の集落跡を物語っており、自然科学的分析も含めて現在整理中である。

（松田　訓）


A区南西から


B区南東から



小針遺跡遺構位置図（１：５００）

上橋下遺跡（かみはしか）

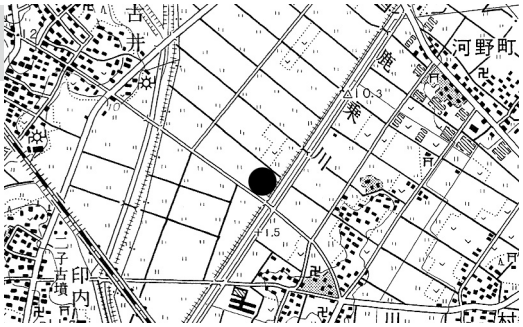
所　在　地　安城市川島町・古井町地内

調 査 理 由　鹿乗川改修

調 査 期 間　平成 16 年 1 月～ 3 月

調 査 面 積　600 ㎡

担　当　者　小嶋廣也・松田　訓



調査地点（1/2.5 万「安城」）

調査の経過　調査は鹿乗川改修工事に伴う事前調査として、愛知県建設部河川課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成16年1月から3月にかけて実施した。調査を行った面積は600㎡である。

立地と環境　上橋下遺跡は、矢作川右岸に形成された沖積低地の中で、ここを流れる鹿乗川の西側微高地上に立地する。調査地点の旧態は水田で、周辺一帯は現在も水田が広がる。現地表高は、約3.0ｍを測る。

調査の概要　調査地点の基本層序は、客土の下に旧耕作土が0.2ｍ入り、その直下に数層のシルトが堆積していて、灰色シルト層では古代末から中世の、暗赤褐色シルト層では弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が含まれていた。

調査地点は鹿乗川右岸に沿って、一昨年度･昨年度と順次北側から調査が行われており、本年度の調査区はこれら調査地点の南側に設定された。

昨年度までの両調査区で検出された自然河道は、今年度の調査地点でも縦断しており、上面で確認された遺構は、水田・溝・土坑などであった。遺物はこれらの遺構に伴うものがほとんど見られず、遺構の時期を特定することが困難であった。検出作業の段階で確認できたものは、わずかな灰釉陶器片、山茶椀片であった。

下面で検出された遺構は、方形周溝墓、溝、土坑などで、寄道式期と思われる土器片が確認できた。隣接調査地点では、方形周溝墓と考えられる溝が確認されており、これらの成果を検討することによって、遺構の性格が検証されるべきであろう。（松田　訓）


上面全景


東壁